

総合的な探究の時間に関する研究〔最終報告〕

小辺 江美¹ 吉田 早織²

予測困難な時代を迎える中で、解決が容易でない現代的な諸課題に対応していく資質・能力を教科等横断的な視点で育成することが求められている。本研究では、総合的な探究の時間における、探究のプロセスの充実や校内体制づくりに関する調査研究協力校の取組について考察した。研究成果を発信することで、今、求められる資質・能力の育成に向け、各学校の総合的な探究の時間における取組の充実に資することを旨とする。

はじめに

平成30年3月に告示された「高等学校学習指導要領」では、学習の基盤となる資質・能力や解決が容易でない現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成していくことができるよう、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることが示された。また、それらの資質・能力を育成するために、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総合的な探究の時間編』(以下、解説という)では、「総合的な探究の時間を教育課程の中核に位置付けるとともに、各教科・科目等との関わりを意識しながら、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うこと」(文部科学省 2018 p.76)とされ、総合的な探究の時間の教育課程上の重要性が示された。

令和元年度から年次進行で先行実施された総合的な探究の時間に対応するため、神奈川県教育委員会(以下、県教委という)は、「県立高校改革実施計画(Ⅱ期)」(以下、指定校事業という)において、「『総合的な探究の時間』に係る研究」に取り組む研究開発校(以下、指定校という)を10校指定し、研究開発の支援を行っている。神奈川県立総合教育センターは、令和元年度・令和2年度の2年間、指定校のうち県立舞岡高等学校、県立藤沢西高等学校の2校を調査研究協力校(以下、協力校という)とし、総合的な探究の時間に関する研究を行うこととした。本稿は令和元年度・令和2年度の2年間にわたる研究の取組と成果をまとめた最終報告である。

研究の目的

総合的な探究の時間について、協力校の実践に基づき、よりよい取組の在り方を探り、発信することにより、各学校の取組の充実に資する。

研究の内容

- 1 教育課題研究課 指導主事
- 2 教育課題研究課 指導担当主事

1 研究の背景

(1) 総合的な探究の時間改訂の趣旨・要点

平成28年12月中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、平成28年答申という)では、以下のように総合的な学習の時間の課題が示された。

- 総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが十分に行われていない
- 探究のプロセスの中でも「整理・分析」「まとめ・表現」の取組、探究のプロセスを通じた一人一人の資質・能力の向上が十分に意識されていない
- 小・中学校の取組の成果の上に高等学校にふさわしい実践が十分に展開されていない

(中央教育審議会 2016を基に作成)

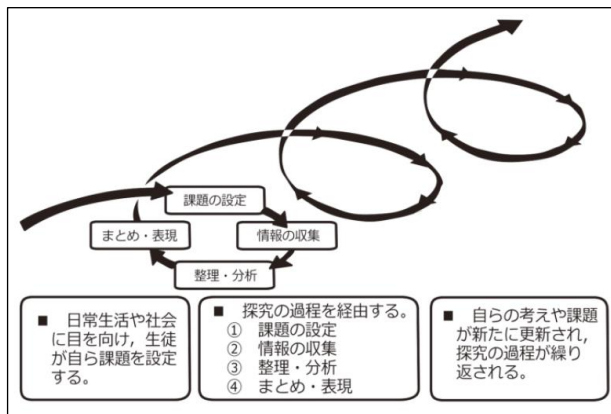
平成28年答申を受け、新学習指導要領では、「総合的な学習の時間」の名称が「総合的な探究の時間」に変更され、解説において、以下のように要点が示されている。

- 小・中学校における総合的な学習の時間の取組を基盤とした上で、各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的・統一的に働かせる
- 自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら「見方・考え方」を組み合わせて統合させ、働かせながら、自ら問いを見だし探究する力を育成する
- 総合的な探究の時間のねらいや育成を目指す資質・能力を明確にし、教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう、各学校が総合的な探究の時間の目標を設定する際に、各学校における教育目標を踏まえて設定する
- 各学校で設定した総合的な探究の時間の目標を実現するにふさわしい探究課題を設定する

(文部科学省 2018 p.7を基に作成)

(2) 探究の定義

探究とは、「物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営みのこと」であり、「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことである(文部科学省 2018 p.12)。探究において、生徒は、探究の過程①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現)を発展的に繰り返していく(第1図)。このことを探究のプロセスという。



第1図 探究における生徒の学習の姿(文部科学省 2018 p.12を基に作成)

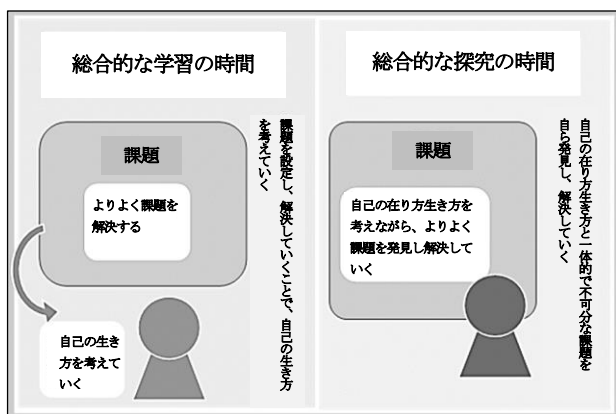
この探究のプロセスを支えるのが「探究の見方・考え方」であり、解説では次のように示している。

【探究の見方・考え方】
各教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に活用して、広範で複雑な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の在り方生き方を問い続ける

(文部科学省 2018 p.13を基に作成)

(3) 総合的な探究の時間の特徴

解説では、小・中学校の「『総合的な学習の時間』」は、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、『総合的な探究の時間』は、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく(第2図)とされた(文部科学省 2018 p.8※『』は、筆者加筆)。



第2図 課題と生徒との関係(イメージ)(文部科学省 2018 p.9を基に作成)

自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し、解決していくことのできる生徒の姿を実現していくに当たっては、「生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものであることが求められる」(以下、質の高い探究という)(文部科学省 2018 p.9)とされた。質の高い探究について、解説では次のように示している。

【探究の過程が高度化する】

- ① 目的と解決の方法に矛盾がない(整合性)
- ② 適切に資質・能力を活用している(効果性)
- ③ 焦点化し深く掘り下げて探究している(鋭角性)
- ④ 幅広い可能性を視野に入れながら探究している(広角性)

【探究が自律的に行われる】

- ① 自分にとって関わりが深い課題になる(自己課題)
- ② 探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる(運用)
- ③ 得られた知見を生かして社会に参画しようとする(社会参画)

(文部科学省 2018 p.9を基に作成)

高等学校では、このような生徒の姿を目指し、自ら課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することが求められている。

以上を踏まえて、本研究では協力校の実践を調査し、よりよい取組の在り方について考察した。

2 研究の概要

(1) 令和元年度の取組

協力校における、総合的な探究の時間の授業や校内研修会等の取組の調査、分析を行い、その成果や課題を整理するとともに、カリキュラム・マネジメントにつながる取組を探った。また、教職員対象のアンケート調査を実施した。

(2) 令和2年度の取組

令和元年度に引き続き、総合的な探究の時間に係る取組について調査、分析を行い、教職員対象のアンケート調査を実施した。その成果や課題を整理し、よりよい取組の在り方について分析や考察を行った。

3 研究の手立て

(1) 調査における二つの視点の設定

先述のとおり、県教委は指定校事業において『総合的な探究の時間』に係る研究に取り組む指定校を10校指定し、研究開発の支援を行っている。指定校事業における指定校の研究内容は次のとおりである。

- (1) 次のことについて研究することとし、各指定校で研究テーマを設定すること
 - ア 探究のプロセスによる学習過程の在り方についての実践及び検証に関すること
 - イ 「総合的な探究の時間」を充実させるための校内体制

づくりについての実践及び検証に関すること
 ウ 「総合的な探究の時間」を中核としたカリキュラム・マネジメントの在り方についての実践及び検証に関すること
 (2) 学校全体として組織的に研究に取り組むための体制を整えること
 (3) 高校教育課主催の「探究活動に係る指導力向上研修」へ各校1名以上参加し、研修成果を校内で共有すること

本研究においては、令和元年度に引き続き、指定校の研究内容である、「探究のプロセスによる学習過程の在り方についての実践及び検証に関すること」(以下、探究のプロセスに関する取組という)及び「『総合的な探究の時間』を充実させるための校内体制づくりについての実践及び検証に関すること」(以下、校内体制づくりに関する取組という)の二つの視点から、協力校の授業や校内研修会等の取組の調査、分析を行い、その成果や課題を整理した。

【視点①】 探究のプロセスに関する取組

「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」の充実に関すること

【視点②】 校内体制づくりに関する取組

「校内推進体制の整備」、「教職員の研修」及び「外部との連携」の充実に関すること

【視点①】については、生徒が探究の過程を理解し、自律的に探究活動を行う取組を整理した。

【視点②】については、解説の「総合的な探究の時間を充実させるための体制づくり」において、質の高い豊かな学習活動を実施するためには、校内体制の整備が欠かせないと示されている。本研究では特に「校内推進体制の整備」、「教職員の研修」及び「外部との連携の構築」について整理した(文部科学省 2018 pp. 139-153)。

(2) 聞き取り調査

総合的な探究の時間の取組における教職員や生徒の現状を知るために、協力校を訪問して、クラス発表、全体発表会等に参加した。また、教職員から聞き取り調査を行った。

(3) アンケート調査

総合的な探究の時間の取組について、授業担当者として授業担当者以外の二つに分けて、それぞれの取組状況の把握と総合的な探究の時間に関する教職員の意識調査を実施した。調査の概要は次のとおりである。

1 調査方法
 質問紙による無記名でのアンケート調査
 選択4件法(当てはまる、やや当てはまる、あまり当てはまらない、当てはまらない)、記述
 2 調査期間
 令和元年度 1月～2月
 令和2年度 11月～1月

3 調査対象者
 協力校の教職員(管理職を除く)
 4 回答人数
 2校合計 令和元年度 30名
 令和2年度 49名

授業担当者に対しては、探究の過程に基づいて取組を振り返り、生徒の学習活動が充実するためにどのような工夫をしたのか、また今後の改善点を記述できるよう設問を設定した。総合的な探究の時間は授業担当者や特定の担当者だけではなく、学校全体で関わっていく必要(カリキュラム・マネジメントの視点)があることから、授業担当者以外に対しては、その点に関する意識を見取った。さらに、総合的な探究の時間の担当か否かも分けることで、教職員の意識に差が生じているか等を詳細に分析できるように工夫した。

項目は以下のとおりである。なお、実際のアンケート調査用紙には、協力校の総合的な探究の時間の目標及び探究の過程と質の高い探究についての説明も提示した。

【全員共通】

設問1

あなたの今年度の立場をお答えください。

- 1 総合的な探究の時間授業担当者であり総合的な探究の時間の担当グループ(※)に所属している
- 2 総合的な探究の時間授業担当者であり総合的な探究の時間の担当グループに所属していない
- 3 総合的な探究の時間授業担当者でなく総合的な探究の時間の担当グループに所属している
- 4 総合的な探究の時間授業担当者でなく総合的な探究の時間の担当グループに所属していない

【総合的な探究の時間の授業担当者のみ回答】

設問2

総合的な探究の時間の「探究の過程」についてお答えください。

次の(1)～(4)において、担当しているクラスの生徒についてお答えください。(4件法)

また、指導上工夫したことと今後改善したいことを具体的に記述してください。

- (1) 「Ⅰ課題の設定」が適切にできた。
- (2) 「Ⅱ情報の収集」が適切にできた。
- (3) 「Ⅲ整理・分析」が適切にできた。
- (4) 「Ⅳまとめ・表現」が適切にできた。

設問3

総合的な探究の時間において、生徒の学習の姿が「質の高い探究」を目指すために必要だと思う手立てを記述してください。

【全員共通】

設問4

総合的な探究の時間を核としたカリキュラム・マネジメントに関する次の(1)～(3)にお答えください。(4件法)

- (1) 学校全体で総合的な探究の時間の目標(資質・能力の育成)や年間指導計画を共有できていると思う。
- (2) 総合的な探究の時間の目標(資質・能力の育成)の実現のために、自分自身が教科や特別活動等でどのように指導すればよいかイメージできている。

設問4(2)で、「1 当てはまる 2 やや当てはまる」と回答した方にお聞きします。

イメージできていることを具体的に記述してください。

設問4(2)で、「3 あまり当てはまらない 4 当てはまらない」と回答した方にお聞きします。

どのような手立てがあればイメージできるようになるか、具体的に記述してください。

- (3) 学校全体で総合的な探究の時間の成果、課題や解決方法等を共有することが必要だと思う。(4件法)
学校全体で総合的な探究の時間の成果、課題や解決方法等の共有を図る際に、効果的な時期や方法等について御意見を具体的に記述してください。

設問5

総合的な探究の時間について、御自由に記述してください。

(※)舞岡高等学校では「ワーキンググループ」
藤沢西高等学校では「プロジェクトチーム」

4 協力校の研究概要

(1) 舞岡高等学校の研究概要

令和元年度入学生から、各学年に1単位ずつ総合的な探究の時間を設け、研究主題及び本年度の研究目標を次のとおり設定している。

【研究主題】

SDG sの視点を取り入れて、自己や社会を関連付けて課題を発見し、主体的かつ協働的に、解決の方法を見出していく探究の資質・能力を養う教育プログラムの開発

【本年度(令和2年度)の研究目標】

主体的に他の生徒や地域と連携し、探究のプロセスを理解、実践する。それらを踏まえて課題を深める力を身に付けさせる。

第1学年では、前年度と同様に、①コミュニケーション力向上を目指した舞岡チームビルディング、②思考ツールを活用し探究のプロセスを学ぶ「進路探究」、③地域の企業等と連携し、探究のプロセスを踏まえた上で課題設定力を習得することを目指した「地域探究」を行い、探究の基礎を学ぶための取組を予定していた。しかし、本年度については、③「地域探究」で予定していた地域の企業等に訪問することが難しい状況とな

った。その代わりに、探究の基礎を学ぶ取組を、市販の教材を使用して実施した。

第2学年では、1学期には学校独自の生徒用テキスト(以下、「生徒用テキスト」という)と市販の教材を併用して、「プレ個人探究」を行い、探究のプロセスを理解し、探究の過程において必要となるスキルを習得した。2学期の後半からは、「生徒用テキスト」を使用し、これまでに習得した様々な資質・能力を活用して、「個人探究」を行った。

(2) 藤沢西高等学校の研究概要

令和元年度入学生から、各学年に1単位ずつ総合的な探究の時間を設け、研究主題及び本年度の研究目標を次のとおり設定している。

【研究主題】

自己実現と社会貢献における「総合的な探究の時間」の研究開発及び検証

【本年度(令和2年度)の研究目標】

- ・社会問題の解決を通して、学問や職業が社会と密接につながっていることや学問そのものが相互に関わり合い社会が形成されていることを実感できるような探究活動を設定する。
- ・探究の手法を、全教科に波及させるために学校全体の授業改善体制を構築する。

第1学年では、前年度まで行っていた「保育」というテーマについて、生徒の実態に合わせて見直しを図った。本年度は、自己と社会のつながりに焦点を当てた「自己探究」等を実施し、市販の教材を活用して、SDG sの視点を参考に興味のある課題を選び、同じ課題を選んだ生徒同士でクラスを編成し、探究活動に取り組んだ。

第2学年では、経済・社会的な問題からSDG sの視点を参考に個人で課題を設定し、その後グループで課題を一つにまとめ、探究活動を行った。設定した課題に対しては、高校生としてどのように解決に関わることができるかを考え、更に企業に所属した場合の関わり方も考えた。本年度は「県立高校生学習活動コンソーシアムの取組」(以下、「コンソーシアム事業」という)を活用して民間企業と連携し、探究活動を行った。「コンソーシアム事業」の概要は以下のとおりである。

県教委が県立高等学校と大学や短大・職業技術校等の教育機関及び企業、研究機関との連携を拡充するとともに、生徒の主体的な学びへとつながる様々な教育機会の提供の充実を図るために実施している取組

この事業を活用して、生徒たちがグループで設定した課題に対する解決に取り組み、解決策の根拠を明らかにすることや課題解決のために必要となる力等についての理解を深められるようにした。

また、職員会議後等の時間を有効に活用し、総合的な探究の時間に係る校内研修会を実施して、探究活動

の指導力向上、各学年における探究活動の取組状況の共有を行った。

5 協力校の実践

令和2年度に調査した協力校の総合的な探究の時間に係る取組を、【視点①】、【視点②】で整理した。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、年間スケジュールを組み直し、予定を大幅に変更しての実施となった。

(1) 【視点①】探究のプロセスに関する取組

探究のプロセスの充実は、探究活動を実現するために必要な手立てである。ここでは、協力校の総合的な探究の時間の実践から、探究のプロセスの充実につながった取組を取り上げる。

ア 「生徒用テキスト」の活用

舞岡高等学校では、前年度に引き続き、「生徒用テキスト」を活用した。「生徒用テキスト」は、育成を目指す資質・能力、学習計画、探究活動に必要なスキルの解説や授業で使うワークシート等がまとめられている。そのため、生徒も教職員も目標や全体像を確認することができる。本年度は生徒の実態に合わせて内容を更に充実させ、テキスト編、ノート編、計画書・報告書編、下書き・メモ編と項目を分け、より活用しやすいように工夫されている。「生徒用テキスト」の概要は以下のとおりである。

～テキスト編～

- 1 個人探究って何？
- 2 探究課題を見つける
- 3 情報収集の方法を学ぶ
- 4 情報の整理と論文の書き方

～ノート編～

【2年次】

- 5 個人探究① 学習内容記録表
- 6 個人探究① 学習の記録
- 7 中間報告作成用 アウトライン・シート
- 8 個人探究① 中間報告の概要
- 9 個人探究① 中間報告の自己評価
- 10 個人探究① 半期の自己評価

【3年次】

- 11 個人探究② 学習内容記録表
- 12 個人探究② 学習の記録
- 13 論文作成用 アウトライン・シート
- 14 個人探究② 発表の概要
- 15 個人探究② 論文の自己評価
- 16 個人探究② 半期の自己評価

～計画書・報告書編～

- 17 個人探究 全体計画書

- 18 個人探究① フローチャート
- 19 個人探究 研究計画
- 20 個人探究② フローチャート
- 21 個人探究② 研究計画
- 22 実地調査計画書
- 23 実地調査記録シート
- 24 アンケート計画書

～下書き・メモ編～

- 25 参考文献記録簿
- 26 インターネット検索記録簿
- 27 情報カード整理簿
- 28 お礼状下書き用紙
- 29 下書き用原稿用紙
- 30 メモ欄

(「生徒用テキスト」を基に作成)

このような「生徒用テキスト」を活用することで、生徒は学習に見通しをもって取り組み、探究のプロセスを確認しながら探究活動を進めた。

イ プレ個人探究・個人探究

舞岡高等学校の第2学年では、先述のとおり「プレ個人探究」、「個人探究」を実施した。「プレ個人探究」は、「個人探究」の基礎となる探究活動である。

「プレ個人探究」の目標は、探究の過程を理解するとともに、「個人探究」につながる、探究の過程において必要なスキルを習得し、問題解決・課題解決の資質・能力を高めることである。授業では、生徒の実態に合わせて、市販の教材と「生徒用テキスト」のワークシートを併用した。生徒は、「課題の設定」において、ブレインストーミングで出したアイデアやこれまでに学習したことを基に企画書を作成し、「まとめ・表現」ではクラスで5～6人のグループを作りそれぞれ発表を行った。また、グループから代表一人を選出した後、全体発表を行った。

「個人探究」では、「生徒用テキスト」やワークシートを活用し、生徒が「自分の興味・関心のある課題を自分で設定して、自分で解決すること」を目指した。2年次では探究のプロセスの「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」までを行い、3年次の「まとめ・表現」につなげる予定である。特に、「課題の設定」においては、スモールステップを意識した丁寧な指導が行われていた。生徒が自分事として課題を設定しながら探究活動に取り組めるように配慮されており、生徒が自己の課題を十分に理解し、ワークシートやクラス発表に主体的に取り組んでいた。このような配慮により、生徒が自分事の課題をより自律的に探究することで、探究のプロセスが定着している様子が見られた。

ウ テーマの見直しを踏まえた取組

藤沢西高等学校の第1学年では、探究活動をする上で、生徒の実態に合わせて、テーマの見直しを踏まえ

た取組を行った。前年度までは、「保育」をテーマに総合的な探究の時間を行ったが、プロジェクトチーム(後述参照)が検討を重ねて取組の見直しを図った。本年度の取組の中で行った「自己探究」では、自己と社会のつながりに焦点を当て、市販の教材を活用して、SDGsの視点を参考に興味のある課題を選び、同じ課題を選んだ生徒同士でクラスを編成し、探究活動に取り組んだ。

(2)【視点②】校内体制づくりに関する取組

校内体制づくりは、各学校で様々な工夫をして取り組んでいる。また、課題として挙げられているところでもある。ここでは、協力校の取組の中で、よりよい校内体制づくりにつながった実践を取り上げる。

ア 「コンソーシアム事業」の活用

藤沢西高等学校の第2学年では、「コンソーシアム事業」を活用し、民間企業と連携して探究活動に取り組んだ。活動内容として、連携先の企業(製菓会社)の社員になったことを想定し、会社に対して新たな企画のプレゼンテーションを行った。目標を「SDGsの視点から社会的な課題について考察する学習を通して、生徒の資質・能力の育成を目指す」とし、生徒の資質・能力については、学校独自の評価規準表を作成して評価している(第1表)。

第1表 学校独自の評価規準表(抜粋)

	観点	観点の具体
知識・技能	知力・学力	各教科の内容を理解し、活用する力
	情報収集能力	複数の情報を収集できる力
	計画力	主題の発見から結論に至る過程を計画的に進める力
思考力・判断力・表現力	課題発見力	複数の情報から解決すべき課題を見つける力
	原因分析力	課題の背景や要因をデータに基づき分析する力
	論理的思考力	客観的なデータや先行資料を用いて理論を展開する力
	発信力・受信力	自分の考えを分かりやすく伝える力
	協働力	他者の価値観を尊重しつつ、他者と協力し一つのものを成し遂げる力
学びに向かう態度	メタ認知力	自分の行動や考えを客観的に考える力
	自己実現力	自己の人生と社会を結びつけ、多くの情報から生き方について考える力

教職員は、授業担当者である担任・副担任をはじめとして、学年全体で年間指導計画を基に共通理解を図った。アンケート調査では「二度の課題設定を行い、一度目と比べ二度目はより自分や近い社会と関わるような内容にできるよう指導した」という記述があり、課題の設定をする上での指導を工夫していたことが分かる。また、プレゼンテーションの構成も丁寧に指導しており、生徒のプレゼンテーションの内容を充実させていた。

生徒は、グループに分かれて発表テーマについての

探究活動を協力しながら進めていた。クラス発表では各グループに対しての質疑応答の時間を設定し、生徒同士でやりとりをする場面が見られた。生徒は発表者に対して、内容に関する疑問点や課題解決のための具体例等を質問し、それに対して発表者は根拠を示しながら説明することに努めていた。また、全体発表は学年全体で行い、代表の10グループが連携先の企業の担当者に対してプレゼンテーションを行った(第2表)。

第2表 発表タイトルの一部

発表順	タイトル
3	Let's go to school
4	色の効果もたらすジェンダー差別
5	死んだプラスチックを再生させたい

発表を聞いていた生徒が疑問と感想を記入したワークシートからは、他者の発表内容をよく理解し、自分で新たな課題を見つけることにつながっていることが見て取れた(第3図)。連携先の企業の担当者からは、「様々な取組があるが、身近なところから始めることが大切である」という講評があった。生徒が記入したワークシートからも、SDGsを身近なものとして捉え、自分事として考えていくことの大切さを理解していることが見て取れた。

発表順	3	疑問	映像授業などにおける言葉の壁はどのように解決するのですか??
		感想	ユニセフの募金額のグラフなど、今まで分かっていなくても見ることができ、実感するタイミングのない問題だったの? 問題の深刻さを初めて知りました。問題解決が企業や社会までではなく、個人の取り組みもあり、興味がわきました。
発表順	4	疑問	どうしたら色によるジェンダー問題は是正されると考えていますか??
		感想	初めに動画を見せることにより、全体が発表に集中しやすいと思いました。ジェンダー問題について色に注目することで問題が分かりやすいなと思いました。色をはじめとするジェンダー差別について今の自分ができることはないか考えることができました。
発表順	5	疑問	日本や個人的にできる取り組みはありますか??
		感想	単語や取り組みについて難しいことも多いと感じましたが、ゆくりとした話し方や説明もついていて発表についてより聞く姿勢がとれたと感じました。実物や具体例もあり、問題解決が世の中的に進んでいるということを実感しました。

第3図 生徒が記入したワークシートの一部

イ 校内推進体制の整備

舞岡高等学校では、ワーキンググループが総合的な探究の時間の授業内容等を検討し、学年が実施するという形式をとっている。ワーキンググループは、総合的な探究の時間の企画等を主に担当する広報・研究グループの教職員で構成されており、各学年において総合的な探究の時間の実施を主導している。第2学年では、「プレ個人探究」、「個人探究」で行う内容を計画的に検討し、実施の前には学年会で教職員の共通理解を図り、新たに出た意見等を集約し、実際の授業にいかすという仕組みを確立した。

藤沢西高等学校では、プロジェクトチームが総合的な探究の時間の授業内容等を検討し、学年が実施するという形式をとっている。プロジェクトチームは、各学年の総合的な探究の時間(第3学年は総合的な学習

の時間)の担当で構成されており、グループ業務とは独立したチームとして位置付けられている。各学年で共通理解をもちながら取組を進めており、学習指導案や学校独自の評価規準表等を学年で共有し、授業担当者が授業を行いやすい工夫がされている。

協力校では、ワーキンググループあるいはプロジェクトチームの教職員が、学校全体で取り組みやすくするための資料を作成する等、全教職員が取組について理解を深められるようしていた。しかし、聞き取り調査からは、「教職員全員が当事者意識をもてるとよい」といった意見があり、一部の教職員が負担を抱えている現状があることが分かった。授業担当者以外のアンケート調査の記述にも、「先生方の準備、負担が大きいのと思う」、「毎年が試行と思われるので、申し送りや改善が必要である」とあるように、校内体制に課題を感じている教職員もいた。授業内容の共通理解を図ることについても、全体に浸透させるのは難しい場合もあるため、今後は教職員一人ひとりが、学校全体の取組として捉え、実践していくことが必要である。

ウ 教科等横断的な取組

舞岡高等学校では、11月2日(月)から11月30日(月)の期間に、「生徒が主体的に学べるような探究型授業」をテーマに校内研究授業を行った。前年度の研究授業は総合的な探究の時間のみであったが、本年度はテーマを踏まえて、教科内で授業案を考え、各教科が探究活動を取り入れた授業を実践した。アンケート調査の記述に、「探究のことを考えるようになってから教科指導においてもどう問いかけをすれば生徒が深く考えるかがわかるようになった」とあるように、探究活動を取り入れることは、各教科・科目等の充実にもつながる。校内では、生徒が取り組んだ探究活動の成果物を廊下に掲示しており、取組の成果を学校全体で共有している様子が分かった。

研究のまとめ

1 成果と課題

令和元年度の本研究で挙げた課題を踏まえ、令和2年度の成果と課題を、【視点①】、【視点②】で示すとともに、カリキュラム・マネジメントの充実につなげるための方策を提示する。令和元年度の課題として、生徒の発表や質疑応答の様子、協力校の公開研究授業の研究協議における教職員の発言や研究担当者等への聞き取り調査から、二つの課題を提示した。

- | |
|----------------------------|
| ①他者の発表に対して、なかなか質問することができない |
| ②説明の場面で、十分に根拠を提示することができない |

令和2年度取組では、質疑応答を行う場面を多く設定しており、生徒が他者の発表に対して内容に関す

る質問をする場面が度々見られた。また、質問を受けた生徒は、情報収集で調べたことから根拠を示し、適切に答えることができていた。これらのことから、前年度の課題を改善することができていたと考えられる。

(1) 【視点①】探究のプロセスに関する取組

舞岡高等学校の「生徒用テキスト」は、生徒の実態に合わせてスモールステップを意識して丁寧に作成されている。そのため、生徒は見通しをもって探究活動に取り組むことができていた。教職員にとっては授業における具体的な手立てについて理解するツールとなる。また、学校全体で総合的な探究の時間について共通理解を図ることができる。生徒は、「生徒用テキスト」等を活用し、「個人探究」において探究のプロセスを理解しながら探究活動に取り組んでいた。このことから、生徒の実態に合わせて工夫や改善を重ねて作成した「生徒用テキスト」は効果的であり、探究のプロセスの充実につながったと考えられる。

藤沢西高等学校では、自己と社会の関係性について探究活動を行うことを目指してテーマの見直しを図り、実社会・実生活とのつながりや社会貢献を生徒に意識させて新たな取組を実践していた。この取組では、探究のプロセスを理解しながら、生徒一人ひとりが自律的に探究活動に取り組むことができていた。テーマの見直しや改善に柔軟に対応したことで、探究のプロセスの充実につなげることができたと考えられる。

探究のプロセスに関する取組は、生徒の実態に合わせて行うことが成果につながる。そのためには、「生徒用テキスト」やテーマの見直しを継続していく必要がある。生徒が自分事の課題を自律的に探究していく工夫やテーマの見直しを継続的に行うことで、総合的な探究の時間における取組の改善が期待できる。

(2) 【視点②】校内体制づくりに関する取組

舞岡高等学校では、探究活動を各教科・科目等で取り入れ、校内研究授業を行っていた。このような取組は、教職員一人ひとりが探究活動の理解を深めた結果であると考えられる。校内の研究担当者が「総合的な探究の時間で身に付けた資質・能力を、各教科でも繰り返し学習することは、探究を内在化させることにつながる」と聞き取り調査で発言していたように、このような教科等横断的な取組は、学校教育全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントにもつながる。今後も継続的に、教科等横断的な取組を学校全体で推進していくことが重要である。

藤沢西高等学校では、外部との連携を図り、「コンソーシアム事業」を活用した。学校が外部と密に連携をとることは、生徒の視野を広げ、社会的な問題等を身近に捉え、探究活動を行うことに有効であったと考える。外部からの視点が入ることは、実社会・実生活とのつながりや貢献性の自覚をもつことに有効である。目標を達成するための手立てとして、外部との連携を

必要に応じて行うことは、総合的な探究の時間の取組を更に充実させることにつながる。また、生徒が探究活動を通して、新たな気付きや次の課題等を見つけることにもつながっている。このことから、「コンソーシアム事業」を活用することは、生徒の探究活動をより活発にすることに効果的であると考えられる。

さらに、評価に関しては学校独自の評価規準表を作成して、教職員が評価規準について共通理解をもつことができるような工夫があった。この実践は本年度からであるが、教職員も生徒も身に付ける資質・能力についての共通理解をもって探究活動を進めることに効果的である。今後も引き続き改善、修正をしながら学校全体で共有していくことが重要である。校内研修会については、時間を有効に活用し、教職員で取組内容の共有を図った。このような研修会を継続していくことが、学校全体の取組の推進につながると考える。

校内体制づくりに関する取組は、打合せや校内研修会等の時間の確保や教職員の負担感等の課題がある。アンケート調査では、「当該学年に所属していなければ詳細はわからないので、校外体験、発表会などの機会に全職員が見学したり、役割分担したりする機会をつくる」、「『何のためにやっているかわからない』という状態にならないために、研修会や課題共有のためのワークショップなどの機会をつくる」という記述もあった。学校の実態に応じて、取組内容の見直しや改善を継続しながら、校内研修会や研究授業等を実施することで、学校全体の取組にしていくことが求められる。

(3) カリキュラム・マネジメントの充実につなげるために

総合的な探究の時間を教育課程の中核に据え、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うためには、総合的な探究の時間の意義、目標や内容について、学校全体で共通理解を図る必要がある。アンケート調査では、「教員間での指導についての共有がまだ足りないと感じている」、「目標やあり方を話し合っ共有し、学校として動くべきでは」という記述があり、学校全体で目標や内容等を共有する必要性を感じている教職員がいることが分かった。そのため、单元ごとの実施内容や振り返りを共有し、意見交換を行うことが必要であるが、一方でそのような時間を確保する難しさもある。学校の実態に応じて、年間の見通しをもつ、研究授業を実施する、振り返りを行う時期を設定する等の工夫をして、取組を共有していくことが重要であると考えられる。

2 今後の展望

今後は、引き続き「探究のプロセスに関する取組」、「校内体制づくりに関する取組」について、学校の実態に応じて改善を重ね、総合的な探究の時間に関する取組を更に充実したものにしていくことが求められる。ま

た、総合的な探究の時間で育成を目指す資質・能力の具体を全教職員で共有するとともに、各教科・科目等で探究活動を意識した授業を、学校全体で行うことが必要である。これは、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントにもつながることである。そのためには、教職員一人ひとりが育成を目指す資質・能力の具体をイメージし、各教科・科目等の時間で探究活動を継続して実践していくことが大切である。各学校においては、「生徒用テキスト」の作成や外部連携等、協力校の取組を参考にして、総合的な探究の時間に関する取組を充実させることが望まれる。

また、指定校事業は3年間であり、令和3年度へ向けて協力校の取組は継続していく。総合的な探究の時間の取組を学校全体に波及させ、よりよい在り方を探り、更に発展していくことが期待される。

おわりに

新型コロナウイルス感染症の影響で、令和2年度はまさに予測困難な事態が続いた。そのような状況の中で、総合的な探究の時間における探究活動を通して、解決が容易でない現代的な諸課題に対応していく資質・能力を育成する重要性を再確認した。

最後に、本研究を進めるに当たり、御協力頂いた協力校の皆様や御指導、御助言を頂いた国立教育政策研究所 研究開発部 渋谷一典 教育課程調査官に心より感謝申し上げます。

[調査研究協力校]

県立舞岡高等学校

県立藤沢西高等学校

[助言者]

国立教育政策研究所 教育課程研究センター

研究開発部 教育課程調査官 渋谷 一典

引用文献

- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 p. 236
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2021年1月6日取得)
- 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総合的な探究の時間編』 学校図書

参考文献

- 神奈川県教育委員会 2018 『県立高校改革実施計画Ⅱ期(2020年度～2023年度)』